研究論文

泮池の語源、泮水について

外 村 中*

The Origin of the Term Hanchi

Ataru SOTOMURA

摘要: “泮池”という言葉は、現在、日本庭園史の分野では、建物の前面に位置し、その建物へ行くための橋が架けられた池を指す分類用語として使われている。

ところで、その定義解釈は、果たして、適切だろうか。本稿は、泮池という言葉の歴史的・伝統的意義を探り、現在の定義解釈に関する疑問点を指摘するものである。

はじめに

そもそも、泮池は、“泮水”とも称され、古代中国より、学校建築の象徴的構成要素として工夫されてきた半円形池のことである。天子（すなわち、皇帝）の学宮であった辟雍に円形池がめぐらされたのに対し、諸侯の学宮であった泮宮には、半円形池が設置され、泮水と称されたという〔図1〕。この伝えに基づき、後の時代に、学校建築に、半円形池を設置し、それを、泮水、あるいは、泮池と名付ける伝統が確立した〔図2〕。この伝統は、中国に限られるものではなく、江戸時代の日本においても確認される。〔図3〕。

ところが、「辞源」¹⁾や「辞海」²⁾が指摘するように、泮宮は、本来、学宮ではなかったとする文献や、泮水は、川の名であったとする文献もある。これらは、泮池の語源を検討する上で、大変重要で、無視できない資料である。しかしながら、これらに詳しい近年の研究は見当たらない。特に、日本庭園史の分野では、これら二点は、まったく無視されている。

また、現在、日本庭園史の分野では、なぜか、建物の前面に位置し、その建物へ行くための橋が架けられた池を、総じて、泮池といい、必ずしも、学校建築に導入され泮池と名付けられた池に限ってはいない〔清水(1940-1941)〕³⁾。そして、水により、俗世間と聖域とを半分に分けるから〔上原(1978)〕⁴⁾とか、あるいは、橋により、水を半分にするから〔外山(1934)〕⁵⁾とかいった理由により、泮池と称すと一般に考えられている。なぜ、このように考えられるに至ったのであろうか。また、現在の日本庭園史の分野における泮池の定義解釈は、は

図-1 天子辟雍図(上)と諸侯泮宮図(下)

たして、適切なものであろうか。検討の必要があろう。そこで、本稿は、その第一弾として、まず、泮池の語源をたどり、その歴史的、伝統的意義を再考することを目的とする。

泮池の語源は、泮水で、泮宮という宮に関連する水であったといわれる。そこで、まず、第一章では、泮宮とは、いったい、何であったのかという点から始めたい。続いて、第二章では、泮水についての多くの学説を整理する。第三章では、天子の学宮であったとされる辟雍に

*京都大学農学部造園学研究室

ついて、若干、言及する。第四章では、泮池が、孔廟（すなわち、孔子を祀る廟）に、受け継がれたことを紹介する。そして、第五章にて、泮池の定義解釈に関しての再考を提言して結論とする。

1) 泮宮

泮宮、ならびに、泮水に関する最古の記録が、東洋最古の詩篇で、五経の一つである「詩経」にある、「魯頌・泮水」⁶⁾という詩である。この詩は、春秋時代に魯の僖公（r.659-627 B.C.）が、泮宮を建設したこと、また

図-2 学宮図

図-3 備前岡山藩学校図

淮夷を帰服させたことを祝すものである。泮宮において、飲酒の礼、軍事的儀式等が行われたと詩われている。同じく、五経の一つである「礼記（礼器）」には、「魯の人は、上帝を祀るときは、必ず、まず、泮宮において、その祭事を取り行なった。」⁷⁾とある。漢の許慎の「説文解字」によれば、泮宮とは、「諸侯が、饗射、〔すなわち、礼制と弓射を行なう〕宮であった。」⁸⁾という。また、漢の司馬遷は、「史記（封禅書）」で、礼制建築、（すなわち、祭祀等の儀式を行なうための建築物）として、「天子の明堂、辟雍と、諸侯の泮宮」⁹⁾をあげている。これらより、泮宮は、礼制建築であったとみなせよう。

ところが、「礼記（王制）」では、「泮宮は、天子の辟雍に対する諸侯の学宮であった。」¹⁰⁾とされ、「礼記（明堂位）」では、「周の（制度にもとづく）学宮であった。」¹¹⁾と記されている。そこで、一般には、泮宮は、礼制や弓射の行なわれた諸侯の学宮であったと考えられるに至っている。

この点に関して、清の凌揚藻の「蠡勺編」には、江永という者が考証を行ない、泮宮は、郊、（すなわち、天を祀る礼）のために作られた礼制建築であり、学宮ではなかったと唱えていることが記録されている。その説がすべて正しいと認められるかどうかは別にしても、彼の考証は、貴重な資料となるものであるから、ここに、その全文を紹介する。尚、理解を助けるために、若干の説明を加えて意識した。〔 〕は、筆者による補注を示す。不適切な箇所もあろうかと思われるので、必ず、註の原文を参照されたい。

泮宮は学宮にあらず¹²⁾

新安の江永は、次のようにいう。

魯国では、郊は、〔春秋時代〕僖公の時より始まったものであろう。また、泮宮も、郊のために作られたものであろう。だからこそ、「魯国の人は、上帝を祀る時には、必ず、まず、泮宮においてその祭事を取り行なった。〔礼記（礼器）〕」といわれるのだ。これも、やはり、天子の制に倣ったものである。「王は、郊を行なう時、沢に立って誓命を聴いた。〔礼記（郊特性）〕」泮宮も、〔この〕沢辺の宮の様なものであって、そこで、誓命を聴いたのである。すなわち、泮宮は、齋宮でもあって、「隠公が鍾巫を祭った時、社圃において潔齋した。〔左伝（隠公11年）〕」ようなものであったと思われる。泮宮で祭事を取り行なったというのは、郊において、上帝を祭祀したということである。泮とは、魯国の川の名である。その川の岸辺に作られたため、泮宮といった。宮が完成して、僖公は、酒宴を催した。魯国の人は、仰々しい言葉を残している。「淮夷に打ち克ち、献賦、〔すなわち、打ちとった相手の

左耳を切り取ること〕、また、献囚〔すなわち、捕虜を献ずること〕を行なった。淮夷がたから物を献じに来た。〔詩経（魯頌・泂水）〕”これは、事実でなく、うわべを飾っただけの言葉である。〔詩経〕の文には、立学教民の意味はない。“小となく大となく公に従って邁く。〔詩経（魯頌・泂水）〕”というのは、僖公に従って飲酒したことにすぎない。すなわち、泂宮は、学宮ではなかったのである。〔礼記（明堂位）〕では、泂宮を、周の〔制度にもとづく〕学宮とみなしているが、信じるに足りない。〔これは、周代末期に、魯国の見識の狭い学者がつくったものか、あるいは、漢代に馬融が増しくわえたものであろう。〕漢の文帝は、博士に〔礼記（王制）〕を編ませた。〔同編に、〕“天子の学宮を辟雍といい、諸侯の学宮を泂宮という。”とある。私の解釈では、辟雍の形式は、水が丘をめぐること壁、〔すなわち、環形玉器〕のようであって、諸侯の場合は、その半分としたものであろう。また〔詩経〕の献賦と献囚の虚辞にもとづき、“天子は、出征にあたり、学宮で計謀を決し、有罪の者を捕らえて帰った時には、学宮で先聖先師を祀り、捕虜や〔打ちとった相手の〕切耳の数を告げた。〔礼記（王制）〕”と思われている。そもそも、学宮を立てて先聖先師を祀るのは、訊讞訊囚〔すなわち、捕虜や、切耳をしらべること〕を行なう場を設けることではない。出征にあたり、兵器を廟に集め、帰征にあたり、飲酒して祝い、廟へ参って、祖先に、首尾の宜しきを告げたのである。〔周礼〕や〔左伝〕には、学宮の中で、献捷、〔すなわち、戦勝報告や捕虜を献ずること〕を行なったという記載はまったくない。すなわち、前掲の〔礼記（王制）〕の説は、〔詩経〕の言葉を附会したものであること疑いない。泂宮が、学宮とみなされて以来、すでに久しい。今すぐ、この説を正しく改めることはできないにしても、どうして、本を読む者が、何の疑問も抱かないでいるのだろうか。泂宮を作ることは、土木工事でもある。ある説によれば、〔泂宮をつくることは〕学宮をたて、民を教化し、礼を尊ぶことである〔が、泂宮が、ただの国学に過ぎず、立派ではなかった〕から、〔春秋〕には、記載されなかったという。これは、誤りである。僖公は、郊を大々的に始めており、そのことを記載しないはずはない。三十一年に郊を行なう日を卜ったとある。もし、このことが、最初から、記載されていなければ、郊のために泂宮を作ったということも、忌避して、記載されなかったことになるのである。

ところで、以上の江永の説で、特に、注目に値するのは、“泂宮は学宮であった。”と明示する最古の文献資料である〔礼記（王制）〕と〔礼記（明堂位）〕の記載内容を否定している点である。実際、漢代より、泂宮は、古代における諸侯の学宮であったとする説が大方の説と

なり、そして、今日に至っている。しかし、さらに検討の必要があろう。また、泂水を川の名としている点も注目に値しよう。この点に関して、次章で検討したい。

2) 泂水

さて、泂水は、泂宮に関わりのあるものであったとされるが、その正体については、説が二つに分かれる。

その一つは、泂水は、泂宮にあった池のことであるとする説で、泂宮の水だから、泂水であるという。実際、この説が、通説になっている。

もう一つは、上記の「泂宮は学宮にあらず」の説にあるように、泂水は、川の名であったとする説で、泂宮は、泂水という川の岸辺に建設されたため、泂水の宮、すなわち、泂宮と名付けられたという。

前者の一例が、高田（1968）^{13）}の説で、彼は、漢の毛亨の伝や、同じく漢の鄭玄の箋などをあげ、〔詩経（魯頌・泂水）〕に注をし、泂宮の南面の水を泂水とするのが、漢儒の古訓であるとし、後者を後世の異説とみなす。ちなみに、毛亨の伝には、泂水は、“泂宮の水なり。天子は辟雍諸侯は泂宮なり。”^{14）}とあり、鄭玄の箋には、“辟雍とは土を築いて水の外を防ぎ、円きこと壁の如く、四方から来て観る者に均しく見える。それに対して、泂は、半。半水とは、東西の門以南に水を通じ、北半分には水がないもの。”^{15）}とある。

また、北魏の酈道元の〔水経注〕も、泂水を池とする前者の一例として数えられる。それによれば、泂水は、二つの池からなっていたという。^{16）}

一方、泂水を川の名とする後者の一例が、目加田（1969）^{17）}の説で、彼は、同じく〔詩経（魯頌・泂水）〕に注をするが、泂水は川の名であったらしく、前者こそ、後世の附会の説であると考え。彼の説によれば、春秋時代の〔詩経〕の言葉を、後の世、すなわち、漢代以降の学者が勝手に解釈したということになろう。尚、泂水が川の名であったと考える理由として、彼は、次のような点をあげている。

一〔唐の杜佑の〕〔通典〕に、“魯郡泗水縣、泂水ここに出ず。”とあること。

一宋の戴培、明の楊用修もみな、泂宮を泂水の宮としているのを〔清の〕姚際恒があげていること。

一〔清の〕呉懋清も、魯の泂宮は、齊の配林（林名）、晋の惡池（川名）と同様なものといっていること。

そして、川であったからこそ、〔詩経〕の歌が、水辺の芹を摘むという草摘み歌の形を始めに繰り返すのだと、彼はいう。

後者のもう一つの例として、陳子展（1983）^{18）}が、清の戴震の〔詩考正〕をあげている。それによれば、“魯国に泂水があり、宮をその岸辺に作った。〔すなわち、泂水は、川の名である。〕それゆえ、他国に、泂宮があっ

たという話を、まったく聞かないのであり、ただ、魯国にあったというのである。宮は、その川に因み、泮宮と称された。”¹⁹⁾という。

さらにもう一例。泮水の流れていたとされる魯国の都は、後の山東省曲阜縣の曲阜にあたるが、その縣志も参照しておく必要があろう。「曲阜縣志」には、“泮水は、沂水の北にある。”²⁰⁾と記されている。

いったい、どちらの説が、正しいのであろうか、現在のところ、断定はできない。確かに、漢代以降、前者の説、すなわち、泮水は、泮宮の水、すなわち、泮宮の池であったとするのが大方の説で、そして、これにもとづき、泮池という言葉が生まれたのは事実である。しかし、さらに検討の必要があろう。

実際、泮水は池であったとする説に伴い、泮宮、泮水の泮という字義が、いろいろと詮索されている。例えば、「詩経（魯頌・泮水）」の鄭玄の箋によれば、“泮は、半である。”²¹⁾とあり、さらに、唐の孔穎達の疏では、これをうけ、“泮は、半のことで、半面に水があり、半面に水がない。”²²⁾という意味であると説かれている。また、「礼記（明堂位）」の鄭玄の注では、“班のことで、政教をわかつ。”²³⁾という意味であるという。

ところで、現在、日本庭園史の分野において、水により俗世間と聖域とを半分に分けるからとか、あるいは、橋により水を半分にするから、泮池と称すとするのは、どうも、これらの説にもとづくもののようであるのだが、後世の附会である観が強い。また、これらの説が、泮水は、泮宮の池であったとする説に則ったものであるから、泮水は川の名であったとする説を否定できない以上、現在の定義解釈が正当であるとは、必ずしもいえないのである。

次に、泮水は、いったい、泮宮のどこに位置していたのだろうか。文献資料を検討する。実際、この点に関しても、説が二つに分かれる。

その一つは、泮水は、泮宮の西南（正確には西と南）にあったとする説で、もう一つは、南（正確には、南半分）にあったとする説である。ただ、どちらの説も基本的には、泮水は池であったとする説にもとづいている。

前者の例として、「説文解字」「水経注」「南巡盛典」等が、あげられる。「説文解字」によれば、“西と南が水で、東と北が牆〔すなわち、垣〕である。”²⁴⁾という。「水経注（泗水篇）」は、“魯の恭王の宮殿の東南が泮宮で、宮中に台がある。台の南にある池は、東西100歩、南北60歩で、台の西にある池は、東西60歩、南北400歩である。台も池もすべて石垣になっている。「詩経」に言うところの泮水である。”²⁵⁾とする。また、「南巡盛典（古泮池行宮）」は、以上の「水経注（泗水篇）」の内

容を引いている。²⁶⁾尚、「南巡盛典（古泮池行宮）」にいう古泮池は、現在、山東曲阜に残っている。この古跡をさらに検討することが必要であろう。〔図4〕

一方、泮水は南にあったとする後者の例としては、“東と西との門以南が水。”²⁷⁾とする「詩経（魯頌・泮水）」の鄭玄の箋、また、“南面のみ水。”²⁸⁾とする漢の班固の「白虎通德論（辟雍）」等があげられる。

実際、現在のところ、どちらが正しいか定かではない。ただ、方位に違いはあるものの、漢代までには、泮宮の半面には水が配され、そして、この水が泮水であるとする説が登場していたことは事実である。そして、後には、水は、南にあったとする説が、大方の説となり、また、この水は、半円形の池ということになった。宋の朱熹は、「詩経（魯頌・泮水）」に、次のような注を施している。

“泮水は、泮宮の水である。諸侯の学宮、饗射の宮を泮宮という。東と西と南〔すなわち、南半分〕に水がある。形は壁の半分〔すなわち半円形〕のようなもので、辟雍の半分である。ゆえに、泮水という。”²⁹⁾

ついでだが、田治（1968）³⁰⁾は、上記の「説文解字」の説明、ならびに、「礼記（王制）」の注に、“南に水を通じ、北に水なし。”とあることをあげ、水は泮宮の南にあったとする後者の説を正しかりとうとする。しかしながら、西南にあったとする前者の説を否定する根拠は示されていない。

ところで、朱熹のいうような、辟雍の半分であったから、泮宮に半円形池が設置されたとする説も、すでに、漢代に登場している。このことは、鄭玄の箋³¹⁾や「白虎通德論（辟雍）」³²⁾等により確認される。秦代ならびに、漢代の長安、咸陽に詳しい「三輔黄図」によれば、“周

図4 曲阜図 東南端に古泮池が見える

の文王の辟雍には、円形池がめぐらされていた。”³³⁾という。そもそも、辟には、璧、(すなわち、環形玉器)のように円い、正確には、環形という意味があり、また、雍には、堤という意味がある。これに対して、泮水は、その半分、すなわち、半円形、正確には、半環形をとるとされた。後の時代、学校建築中に設置され、泮水、あるいは、泮池と名付けられた池が基本的には、半円形という形態をとったのは、これが理由である。

3) 辟雍

ここで、若干、辟雍についてふれておく。辟雍に関しても、諸説紛々であるが、Steinhardt (1984)³⁴⁾によれば、辟雍は、構成上、明堂、(すなわち、天子が政治を行ない、諸侯を朝見するための建築物)と同一建築物中にあったものが、後に、学校建築として独立したという。隋の宇文愷の「明堂議表」³⁵⁾は、多くの文献を引き、明堂をめぐる円形池、すなわち、璧水は、辟雍と称されたこと、堂の方形は地を、屋根の円形は天を象徴したこと、垣の方形は陰で、池の円形は陽を意味したこと、9つの部屋は九州を、円形池は四海を象徴したこと等を書き記している。九州四海とは、全世界を意味する言葉であるから、明堂は、建物と辟雍と称された円形池をもって、全世界、宇宙を象徴するものであったといえよう。また、学校建築としての辟雍の円形池は、「三輔黄图」、ならびに、「白虎通徳論(辟雍)」では、“学問の流行を象徴するもの。”³⁶⁾とされている。

ところで、辟雍の池が、円形という形態をとる理由について、田治(1968)³⁷⁾は、天を象徴するものと考えられるが、理由を明らかにした資料は見当たらないという。しかしながら、彼が引き、意味不明とする「白虎通徳論(辟雍)」の文中に、“辟は、璧である。璧円を象る。また、雍の水によって、天〔の制〕に則らせ、学問の流行を象徴する。”³⁸⁾とある。ずっと時代の下った資料になるが、明の王圻の「三才図会」には、辟雍の円形池は、“天を象徴するもの。”³⁹⁾と明記されている。

円形により天を、方形により地を象徴するのは、一般に、天円地方説と呼ばれる古代中国の天を祀る思想にもとづくものであり、陰陽の組み合わせは、陰陽五行説にもとづくものである。⁴⁰⁾古代の礼制建築の基本構成は、これらの説にもとづき、上円下方、あるいは、外円内方であったと考えられている。⁴¹⁾古代中国人は、世界全体を体系的な有機体ととらえ、それを、人間界とそれを取り巻く環境とに分けて考えていた。人間界を取り巻く環境は、天(天帝、あるいは、上帝ともいわれる)の支配する領域であり、人間界に対して優位のものであった。本来、天への信仰は、天子と民衆の共有するものであったが、秦代に、天を祀る儀式は、国家的共同体の行事とし

て体系化され、さらに、前漢の武帝(140-86 B.C.)の時代に、この思想は、皇帝の専制的権力と結びつき絶頂に達したといわれる。この過程で、皇帝は、天命を享け、天に代わって国民を統治するものと考えられるようになった。また、円は天を、方は地を象徴するものとして意義づけられるようになった。そして、後に、天を祀る思想は、社会秩序を説く儒教にそのまま採用された。その結果、天を祀る思想に関連する明堂や辟雍は、儒教に関連する重要建築物とみなされるようになり、また、泮宮も、儒教の教育研究施設のごとく位置づけられるようになった。

4) 孔廟の泮池

「三才図会」や、清の孫詒讓の「周礼正義」等によれば、周代には、五大学があり、東に東序、西に瞽宗、南に成均、北に上庠、そして、中央に辟雍があったと考えられている。⁴²⁾しかし、史実として確実な学宮は、元朔5年(124 B.C.)に、前漢の武帝が創立した太学が、はじめとされる。⁴³⁾漢代の太学は、儒教の教育研究の場となった。これより、清代の末に至るまで、中国の学宮は、儒教教育研究施設であったともいうことができる。ついでだが、学宮において、孔子を祀ることも、漢代に始まっている。本来、孔子を祀る廟を孔廟と称したが、後には、孔廟を取りかこむ建築群全体、すなわち、学宮そのものを、孔廟というようにもなった。それゆえ孔廟という言葉が、学宮をさすことは多い。

漢代から、続く三国時代にかけては、魏の武帝が辟雍⁴⁴⁾を、また、漢の献帝の時代に、魏国が泮宮を建てた⁴⁵⁾と伝えられる。そして、この辟雍は太学⁴⁶⁾と、また、泮宮も、学宮であった⁴⁷⁾と考えられている。「宋書(礼志一)」によれば、“漢の献帝の建安22年(217)に、魏国が、鄴城の南に泮宮を作った。”⁴⁸⁾とある。ところが、この辟雍を太学のこととするなら、「宋書(礼志一)」に、魏の文帝の黄初5年(224)に、洛陽に太学を建てた。”⁴⁹⁾とあるので、この太学との関係を明らかにする必要がある。

南北朝時代は、政治的に混乱をきわめた時代で、一時、儒教は衰えた。

隋代に至って、再び、儒教は歓迎され、煬帝(1604-618)は、國子監を中心とする学制を創設している。⁵⁰⁾しかし、大いに、学問を興すまでには至らなかったという。⁵¹⁾

唐の太宗(1626-649)が、即位の年、すなわち、武徳9年(626)山東曲阜の孔廟の再興⁵²⁾を、さらには、貞観4年(630)に、州縣における孔廟の建設⁵³⁾を命じてからが、儒教が本格的に復興したといえよう。学問の復興を意図して、太宗が再興した孔廟には、璧池、すなわち、円形池が、あったと、武徳から貞観の間に建てら

れたその碑⁵⁴⁾に記されている。これが、古代、天子の学宮とされた辟雍の円形池に因んでいるのは明らかである。⁵⁵⁾

これ以降、孔廟が全国に渡り建設されていった。孔廟は、孔子を祀る廟であったが、また、同時に、学宮でもあった。時代により、その呼称を異にし、孔子廟、文廟、先師廟、聖廟などとも称された。地方にあった孔廟は、ときに、泮宮とさえ称されることもあった。⁵⁶⁾そして、そこには、半円形池が設置され、泮水、あるいは、泮池と名付けられた。⁵⁷⁾古代の諸侯の学宮、(すなわち、泮宮)にあったとされる泮水という池に因んだのはいうまでもない。図5は、滑縣の文廟図であるが、戟門の前面に半円形池があり、泮池であると記されている。また、最前に位置する牌樓に、泮宮という文字が記されているのも注目に値しよう。この例のように、中国の地方志の多くは、孔廟図、文廟図、学宮図等と題する図を掲載するが、そこには、ほとんどといってもよいほど、池が描かれ、泮水、あるいは、泮池であると記されている。時に、円形、方形のものもあるが、池の基本形は半円形である。ついでだが、この種の池は、孔廟だけに限られるものではなく、仏寺伽藍等においても確認される。北京の十方普覺寺の半円形池は、その好い例である。しかしながら、孔廟以外に設置されたもので、泮水、あるいは、泮池と名付けられたとする例は見当たらない。この点は、注目されるべきであろう。

5) 結論

さて、本稿をまとめると次の通りである。

泮池の語源は、泮水で、泮宮に関わりのあった水のことである。泮宮は、天子の学宮であった辟雍に対する、諸侯の学宮で、その南面にあった半円形池が、泮水である。これが、漢代以降の通説である。そして、この説にもとづき、地方の学宮でもあった孔廟に、半円形池を設置し、泮水、あるいは、泮池と名付ける伝統が、中国で

確立した。そして、その伝統が、日本へも伝わっている。

しかしながら、泮宮、ならびに、泮水の本来の姿には、まだ、多くの疑問が残されている。特に、泮水は、魯国を流れる川の名であったとする説は、泮池の語源を検討する上で無視できないものである。この点は、山東曲阜に残る古泮池という古跡とあわせて、更に検討を必要としよう。

ところで、現在の日本庭園史の分野における泮池の定義解釈が、泮水は川の名であったとする説をまったく無視しているため、必ずしも、正当であるとは限らないことは指摘した。しかしながら、日本庭園史の分野において、学校建築以外に設置された池も泮池と称されるようになった理由等については十分検討できなかった。筆者は、本稿で紹介した泮池の歴史的、伝統的意義から考えて、学校建築以外に設置された池を泮池と称す、あるいは、泮池という言葉をもって分類することには疑問をもっている。再考を必要としよう。

(1989. 7. 21収受付, 1989. 9. 29受理)

註

- 1) 辞源：北京・商務印書館 1982 p.1744 泮
- 2) 辞海：上海・辞書出版社 1979 p.2100 泮
- 3) 清水卓夫：泮池考(一) 林泉第69号 p.223 (1940), 泮池考(二) 林泉第70号 p.245 (1940), 泮池考(三) 林泉第75号 p.77 (1941), 泮池考(四) 林泉第81号 p.269 (1941)：京都林泉協会
- 4) 上原敬二：造園大辞典：東京・加島書店 1979 p.700 泮池(はんち)
上原敬二：日本式庭園：東京・加島書店 1963 p.80 五、泮池
- 5) 外山英策：室町時代庭園史：東京・岩波書店 1934 p.102 八、泮池
これは、日本庭園史の分野で、泮池を取り上げた最初の文献である。
- 6) 「詩経」魯頌・泮水
思樂泮水，薄采其芹・・・
- 7) 「礼記」礼器
故魯人將有事於上帝，必先有事於頌宮，頌宮は、泮宮に同じ。
- 8) 「説文解字」
泮：諸侯饗射之宮，西南為水東北為牆从水半半亦聲
- 9) 「史記」封禪書
天子曰明堂辟雍，諸侯曰泮宮，
これに、学宮と注をする文献もあるが、文意から考えて、礼制建築とするほうが適切だろう。
また、「漢書」郊祀志には、次のようにある。
周公相成王，王道大治，制禮作樂，天子曰明堂辟雍，諸侯曰泮宮，
- 10) 「礼記」王制

図-5 文廟新図

天子命之教，然後為學，小學在公宮南之左，大學在郊，天子曰辟廱，諸公曰頓宮，辟廱は，辟雍に同じ。

11) 「礼記」明堂位

頓宮周學也

12) 凌揚藻：蠡勺編・卷3（嶺南遺書・第6所収）

泮宮非學

新安江氏永曰，嘗疑魯僭郊禘自僖公始，而泮宮亦由僭郊而作，故云，魯人將有事于上帝，必先有事于頓宮，此亦倣天子而為之，王將郊立于澤，以聽誓命，泮宮亦猶澤宮，于此聽誓命，亦即以為齋宮，猶隱公祭鍾巫，而齋於社圃也，有事頓宮，告將郊上帝也，泮者魯之水名，作宮其上，故曰泮宮，宮成而僖公飲酒，魯人遂大為鋪張揚厲之辭，克淮夷獻馘獻囚，淮夷獻琛，皆無其事，誇張虛美，今詩並無立學教民之意，所謂無小無大從公于邁者，從公飲酒耳，即泮宮非學也，明堂位以頓宮為周學，已不足信，〔此篇本周末魯之陋儒為之，或言漢馬融所增〕漢文帝使博士作王制，謂天子之學曰辟雍，諸侯之學曰頓宮，釋者謂，辟雍之制，水旋邱如璧，諸侯半之，又因獻馘獻囚之虛辭，謂天子出征受成于學，執有罪反釋奠于學以訊馘告，夫立學祀先聖先師，非訊馘訊囚之地，出征受兵于廟，歸而飲，至于廟，以告祖宜也，周禮左傳皆無學中獻捷之禮，其為附會詩詞無疑矣，以泮宮為學相沿已久，今雖不能反正其說，而讀諸者何可無疑，作泮宮亦土功之事，說者謂立學教民為得禮，故春秋不書，非也，僖公僭郊為大，惡不可書，故于三十一年卜郊，不從始書之，則因郊外而作泮宮，亦諱不書矣

尚，王將郊立于澤より，聽誓命までは，”王は，郊を行なう時，澤宮という宮に立って誓命を聞いた。泮宮は，また，澤宮の様なものであって，そこで，誓命を聞いたのである”とも解釈される。

また，作泮宮により，春秋不書までは，孔穎達の「毛詩注疏」魯頌譜にある次の注を参考に訳出したが，再考の必要があるかもしれない。

泮水頌僖公能脩泮宮是脩泮宮崇禮教也，（中略），能脩泮宮土功之事春秋經不書者泮宮止國學也，脩謂舊有其宮脩行其教學之法，功費微少，非城郭都邑例所不書也

13) 高田眞治：漢詩大系2 詩經下：東京・集英社 1968 p.616 泮水

14) 17) p.288 目加田の訳より

「毛伝」

泮水，泮宮之水也，天子辟廱，諸侯泮宮，

15) 17) p.288 目加田の訳より

「鄭箋」

辟廱者，築土隄水之外圓如璧，四方來觀者均也，泮之言半也，半水者，蓋東西門以南通水北無也，天子

諸侯宮異制，因形然，

16) 「水經注」泗水篇

殿之東南即泮宮也，在高門直北道西，宮中有臺，高八十尺，臺南水東西百步南北六十步，臺西水南北四百步東西六十步，臺池咸結石為之，詩所謂思樂泮水也，

17) 目加田：詩經・楚辭 〔中国古典文学大系第15巻〕：東京・平凡社 1969 p.288

18) 陳子展：詩經直解：上海・復旦大学出版社 1983 p.1167

19) 「詩考正」

魯有泮水，作宮其上，故他國絕不聞有泮宮，獨魯有之，（中略），宮即水為名，稱泮宮

20) 「曲阜縣志」〔中国方志叢書・華北地方・第19号〕：成文社 1967

卷二輿地志・疆域・山川

泮水又在沂水之北

21) 15) 参照

22) 「毛詩注疏」魯頌・思樂泮水薄采其芹

泮半也，半有水半无也，

23) 11) の注

頓之言班也，於以班政經也，

24) 8) 参照 「説文解字」のこの説明からでは，必ずしも，池であるとは言い切れないが，「水經注」の内容と一致していて興味深い。

25) 16) 参照

26) 「南巡盛典」古泮池行宮

27) 15) 参照

28) 「白虎通德論」辟雍

獨南面礼儀之方有水耳，

29) 「詩集伝」魯頌

泮水，泮宮之水也，諸侯之學，鄉射之宮，謂之泮宮，其東西南方有水，形如半璧，以其半於辟廱，故曰泮水，

30) 田治六郎：泮水 〔日本文化としての庭園 様式と本質（pp.122-131）〕：東京・誠文堂新光社 1968 p.122

31) 15) 参照

32) 「白虎通德論」辟雍

諸侯曰泮宮者半於天子宮也，（中略），半者象璜也，

33) 「三輔黄図」

周文王辟雍，在長安西北四十里，亦曰辟雍，如璧之圓，雍之以水，象教化流行也，

34) Steinhardt, Nancy Schatzman : Han Ritual Hall 〔Chinese Traditional Architecture pp.69-77〕：New York・China Institute in America, China House Gallery 1984

35) 田中淡：隋朝建築の設計と考証 〔中国の科学と科学者〕：京都・京都大学人文科学研究所 1978

- 「明堂議表」の邦訳あり。
- 36) 「三輔黄図」は、33)を参照
「白虎通德論」辟雍
天子立辟雍何，所以行礼樂宣德化也，辟者璧也，象璧圓，又以法天於雍水側，象教化流行
- 37) 30) p.125
- 38) 36) 参照
- 39) 「三才図会」宮室二卷九・天子辟雍圖
其制環之以水圖象天也，
- 40) この段落は，次の文献によるところが大きい。
貝塚茂樹：貝塚茂樹著作集第8巻：東京・中央公論社 1976
好並隆司：秦漢帝國史研究：未来社 1978
- 41) しかしながら，現時点においては，実際に，天円地方を具象化した現実の建築を漢代以前に求めることはできないとされる。次の文献を参照：
田中淡：周原建築遺址の解釈〔新發現中国科学史資料の研究・論考篇〕：京都・京都大学人文科学研究所 1985
- 42) 「三才図会」宮室二卷八・天子五學圖
陸氏佃云，禮記天子設四學，蓋天子立四學并中學而五於一處並建，周人則辟雍居中，其南為成均，其北為上庠，其東為東序，其西為瞽宗，
「周礼正義」春官宗伯下，大司樂掌成均之灋の注
鄭鏗云，周五學中曰辟雍環之以水，水南為成均，水北為上庠，水東為東序，水西為瞽宗，其義最塙 陸佃
黃以周 說五學方位亦同
- 43) Hook, Brian: Cambridge Encyclopedia of China: Cambridge・Cambridge Univ. Press 1982 p.127
- 44) 「洛陽伽藍記」卷三・
靈臺東有辟雍，是魏武所立者，
- 45) 「魏書」武帝記二十二年
五月，作泮宮
- 46) 入矢義高：洛陽伽藍記・水經注（抄）〔中国古典文学大系 第21巻〕：東京・平凡社 1974 p.69
- 47) 本田濟：漢書・後漢書・三国志列伝選 〔中国古典文学大系 第13巻〕：東京・平凡社 1968 p.352
- 48) 「宋書」礼志一
漢獻帝建安二十二年，魏國作泮宮于鄴城南，魏文帝，黃初五年，立太學於洛陽，
- 49) 48) 参照
- 50) 諸橋轍次：大漢和辞典：東京・大修館書店 1967
三巻 p.79 國子監
- 51) 藤原楚水：孔子廟堂碑通解 〔名碑法帖通解叢書・孔子廟堂碑他三種〕：東京・清雅堂 1979 p.67
- 52) 51) 「孔子廟堂碑」
武德九年十二月二十九日，有詔立隨故紹聖侯孔嗣哲子德論，為褒聖侯，乃命經營，惟新旧趾，萬雉斯建，
- 53) 「新唐書」礼樂五
〔貞觀〕四年，詔州縣學皆作孔子廟，
- 54) 51) p.53
蛟梁璧池，圓流若鏡，
- 55) 51) p.57 藤原は璧池は，學宮の圓形の池沼と注をする。
- 56) 18) p.1167によれば，本稿で紹介した大方の説に基づき，後の時代には，国の学宮は辟雍と，郡縣の学宮は泮宮と称されたという。
- 57) この点に関しては，すでに，次の文献に指摘されている。
Boerschmann, Ernst: Gedächtnistempel
〔Baukunst und religiöse Kultur der Chinesen 2〕 Berlin・Georg Reimer 1914

挿図出典

- 図-1 天子辟雍図と諸侯泮宮図（「三才図会」）／30）より
- 図-2 学宮（「正陽縣志」）／中国方志叢書・華北地方第123号 成文出版社 1967
- 図-3 備前岡山藩学校図（「日本教育史資料」付図）／城戸久：藩校遺構：東京・相模書房 1975 p.188
- 図-4 曲阜図／Steinhardt, Nancy Shatzman: Kong Family Mansion〔Chiness Traditional Architecture pp.151-157〕: New York・China Institute in America, China House Gallery 1984 p.152
- 図-5 文廟新図（「重修滑縣志」）／中国方志叢書・華北地方第113号 成文出版社 1967

付記：本稿作成にあたり，村岡正先生，田中淡先生，白幡洋三郎先生に，ご教示いただいた，記して謝意を表したい。尚，内容に関しての責任は，筆者の負うところである。

Summary: In Japan, especially in the field of landscape history, the term hanchi 泮池 or hansui 泮水, which could be translated as a half pond or a half water, is applied to all the ponds that separate secular and sacred precincts or that are themselves divided by a bridge. This paper supplies fundamental information on the hanchi, including its terminology as well as its architectural development, and raises some questions related to its current definition.